



『子育て支援コラム』

平成30年第4回テーマ
【両輪の読書】

お健やかに新年をお迎えのことと存じます。年末年始は新たな時代への期待とともに、東京オリンピック・パラリンピックへのカウントダウンで、例年になく高揚感が満ちていました。子どもたちにとっても、自分が歴史(社会)のなかに生きていることを実感する、ひとつのきっかけとなったことでしょう。

昭和39年の東京オリンピックを契機に、家庭にテレビが普及したその頃から「若者(子ども)の読書離れ、活字離れ」が言われ始め、急速なIT化を遂げた平成の時代もなお、同様のことが言われています。実際にはどうなのでしょう？デジタルネイティブの若い世代は、存外、活字に親しんでいます。電子機器のマニュアルやゲームの攻略本を夢中で読み、SNSやツイッターに文字を綴り、読んでいます。青空文庫(著作権切れの文学作品等を無償で提供するサイト)から情報端末に配信される『走れメロス』や『こころ』などを横書きで読み、ゲーム機の小さなディスプレイで文学全集を読破もします。私たちは「本=紙が綴じてあるもの」という固定概念を外し、電子媒体で展開するコンテンツも本として認める時を迎えているのです。子どもの読書では、10歳から12歳を物語期から伝記期とし、少年少女文学、冒険・推理物語、発明・発見物語、伝記・記録文学・伝奇文学に加え、漫画やコンテンツに親しむことも発達段階の一つと考えます。電子媒体の弊害ばかりを危惧するあまり、子どもが読書と出会うチャンスを奪わぬよう、気をつけたいものです。

一方、紙の本はその質量で、圧倒的な知への憧れや畏敬の念を感じさせます。司書が子どもたちからよく問われることの一つに「ここ(図書館)にある本、全部読んだの？」と聞かれますが、その本と同量の情報量が収められたICチップやROMを見せても、子どもたちから「全部読んだの？」とは問われることはないでしょう。また、読み聞かせやブックトーク、ビブリオバトルなど、本と本に親しむその時間を、周囲の人とシェアし、コミュニケーションを楽しむことができるのも、紙媒体ならではの魅力です。幼い子どもにとっては、家族で同じ本を読む家読(うちどく)が、読書との出会いとして最も自然な方法といえましょう。本を通して楽しさや喜びを共有するこれらの体験は、子どもを本好きにするとともに、読めることへの憧れや大人への信頼感を築きます。

これからの読書は紙媒体と電子媒体の両輪が、子どもにその楽しさや生きる力を与えてゆきます。私たち大人は二つがバランスよく回転するよう、子どもと一緒に両輪の読書を楽しみたいものです。

(JPIC 読書アドバイザー 児玉ひろ美)

